

## エッセイ

## 教室での出来事 「この写真は私のお姉ちゃんです…」 水俣病事件 ―「内なる差別」・「外なる差別」

石井 雅臣

水俣学研究センター客員研究員

### はじめに

現在は医療関係で仕事をしている50過ぎになる元教え子が、先日話しかけてきた。

映画『MINAMATA』の冒頭を見ていて、水俣高校で先生があの写真集を見せながら授業をしていたのを思い出しました。涙が止まりませんでした。この映画をきっかけにして水俣病への学びが深まり正しい理解が広がっていくといいですね。

ジョニー・デップ主演の映画“MINAMATA”の一般上映に先立ち、2021年8月21日に舞台となった水俣で先行上映会が行われることになった。

しかし、報道によると、この映画の上映反対の動きが水俣の街の中にあったという。水俣市は、この映画の製作意図が不明という理由で、熊本県は認めたにもかかわらず映画試写会への名義後援を拒んだという。なぜなのだろうか。映画に事実とは異なる場面があったからだろうか。

私は、この映画“MINAMATA”が、この街の「『水俣病かくし、チツソ擁護、水俣病忘れ』の歴史」の事実を、そして、「反公害患者運動弾圧の歴史」の事実を、今一度大々的に可視化するからだと思う。そして、この映画を受け入れられない人々の心の奥底に、患者さん方への「内なる差別」があるからではないのかと思う。

その差別は、水俣の街の中に今も息づいていると思う。いまだに水俣病病名変更運動がある。同じ延長線上に上映への後援拒否もあるのではないだろうか。

映画“MINAMATA”の宣伝には、患者運動を支えた川本輝夫さんやかかわった多くの人々をたたえる言葉が続く。当然のことながら、闘いの向こう側でチツソ擁護・患者運動弾圧に動いた企業や行政の関係者には反対の評価がともなう。

水俣病公式確認から65年。

水俣病事件は、まだ、終われない。そして、水俣病差別は、再生産され続ける。

私は残念ながら、いまだに「教室での出来事」を語り続けなければならない。

ここでは、40年前の水俣高校の教室で起こった出来事とその後の動きを紹介し、今なお続

く水俣病差別について考えてみたい。

## I 教室での出来事、そしてその後

### LHRでの出来事

今から40年位前のことだ。水俣高校に赴任して3年目となる1984年の6月、LHR（Long Homeroom：週に1時間、教員と生徒で企画して取り組むことのできるクラスの時間）の次週担当班のAという班長が「先生、今度のLHRは胎児性水俣病というテーマで原田正純さんの『水俣病』の本を読んで話し合いたいのですが、いいですか？」と聞いてきた。

その背景には、私が授業でやっていた地域学習「水俣～その過去・現在・未来～」の影響もあったと思う。当時、「スウェーデンの人たちは、政治ば握っとる。日本人は政治に握られとる。水俣からは、日本の見ゆるもんな」という浜元二徳さん（水俣病患者・水俣病第一次訴訟原告）の言葉に刺激を受けて現代社会という教科の中で地域学習を始めていた。

その時、私の気持ちの中には、この重いテーマを生徒たちがとり上げていこうとすることへの喜びもあったが、うまく進めていけるかどうか不安も大きかった。そして担当班の班長に聞いた。「どうやって進めていくのかな？」と聞くと、「図書館に『水俣病（原田正純著）』という本が50冊あるのでそれをみんなで読んだり、写真集などを見せてみんなに意見を言ってもらうようにしたいと思います。」という答えが返ってきた。「そんなら準備ばしっかりして頑張れよ。」そういうやりとりのなかでLHRの準備は進められていった。

### 「この写真は私のお姉ちゃんです…」

当日を迎え、LHRが始まった。内心、うまく進めていけるか心配もあった。そして、私の不安は残念ながら現実のものとなっていった。担当班は一生懸命話し合いを進めていこうとするのだが、教室はこのテーマに集中することなく、指名された者が少し意見を言う。写真集を受け取って、見ることもなく次に回していく。教室は、だんだん硬い雰囲気になっていった。その時の教室には、まさに水俣病をめぐる「街の縮図」を思わせるものがあった。黙ってうつむいている者。自分とは関係ないとばかりに隣とひそひそ話をする者。様々だった。「なんで無関心なんだ。大切な水俣病の話なのに。」私は生徒に内心腹すら立てていた。

そして、読書会がそれほどの成果もあげられずに終わっていかうとしていたちょうどその時、Bさんが席から立ち上がった。クラスに回されていたユージン・スミスの写真集を手に取り、震えながら教壇に立った。そして、声を絞りだすように語り始めた。

この写真は私のお姉ちゃんです。私のお姉ちゃんは、水俣病で目も耳も手足も不自由なまま寝たきりの毎日でした。私のお母さんは、そんなお姉ちゃんに1時間も2時間もかかってご飯を食べさせたり、お風呂に入れたりしていました。目も耳も不自由なお姉

ちゃんでしたが、私が“お姉ちゃん、お風呂よ！”と言うととてもうれしそうにしていました。でも、そのお姉ちゃんもこの前たった21で死んでしまいました。私は、お姉ちゃんをそんなにしたチッソが憎いです。みんな、もっと真剣に水俣病のことを考えてほしいです。

と、涙を目にいっぱいため途切れ途切れに話していった。

クラスに大きな衝撃が走った。教室は静まり返り誰一人口を開く者はいなかった。

私はあまりの驚きで言葉を失ったまま、教室の後ろに立ち尽くすだけだった。恥ずかしかった。Bさんのそんな思いに気づきもせず教師面していた自分が恥ずかしかった。私はその時、教員という鎧を引っ剥がされ、裸のまま生徒の中に放り出されたような気がした。

そしてチャイムが鳴った。私は何も言うことのできないまま教室から逃げ出した。LHRは大きな沈黙の中で終わった。しかし、LHRをこのままにしておくことはできない。かといって自分は どうしてよいのかまったくわからなかった。

私は途方に暮れた。仕方なく重い足を引きずりながらその日は職員室に逃げ帰った。そのあとのことは、頭が混乱してあまり思い出せない。

その日、帰宅した後、私の変調に気づいた妻が「学校で何かあったの？」と聞いてきた。「別に…」と答えた後、しばらく沈黙が続いた。そして、教室での出来事を話した。そんな私に妻は「生徒がそこまで心を開いて、きつい思いで家族のことを語っていったのに、あなたがここで逃げたらだめでしょ。」と言った。

「先生、書かないでほしいんです。」

翌日、学校に行くには行った。そして、クラスで朝の出席をとったものの、昨日教室を逃げ出した私を、生徒たちはじっと見ている。何も言えずにまた、私は教室を逃げ出してしまった。

昼休み時間に、Bさんが私のところに来て言った。

先生。このこと学級通信に書くんでしょ。でも先生、書かないでほしいんです。もうこれ以上このことには触れてほしくないんです。

この言葉に対して、私は、これはBさんだけの問題ではなく皆が真剣に考えなくてはならない問題だから、これをきっかけにしてもっと皆で話し合っていく必要がある、ということを強調して説得しようとした。説得する資格もないのに、教員根性丸出しで…。しかし彼女は心を閉ざしていこうとするばかりだった。

なぜ彼女がそう言い出したのか、彼女の真意はその時よくわからなかった。皆に真剣に考えてもらうためには、自分が話をしなければならないという気持ちがある。しかし、もう考えたくない、そっとしておいてほしいという気持ちもまたある。その2つの気持ちの中で激

しく動揺しているだろうことは想像できた。その時私は、「水俣病」が、いかに彼女に深く重たくのしかかっているのかを、強くおもい知らされたような気がした。

その日の午後になった。授業のために、またクラスに足を向けた。

心の中では「何もなかったことにしたい」「このことから逃げたい」という気持ちが渦巻いた。Bさんの言うように、これ以上このことについて触れないでおうかとも思った。

しかし、もう後には引けないという思いも一方で強くなっていった。「逃げたらいかん」「もっと真剣に水俣病のことを考えてほしいです。」というBさんの言葉にきちんと向き合おうといかん！という気持ちも沸き起こってきた。

授業の出席をとりながらも、心は揺れた。「逃げたい！」「逃げたらいかん。」出席を取り終えるまでの数分が、とてもとても長い時間に感じられた。

もう一度このことについて生徒たちと考えてみよう。私は、「昨日のLHRで、Bさんはきつい気持ちを抑えて、自分の家族のことについて話をしてくれた。そのBさんの言葉に対して返していくものはないか？」とクラスに問い直していった。

卑怯にも、自分をさらすこともなく、Bさんに心から向き合うこともなく、生徒たちに対応を丸投げしていく私だった。教室の沈黙は続いた。何かしなければいけないと思いながら、自分には何ができるのかわからないまま時間が過ぎていった。「ここまでやったのだからもういいだろう。」私は、何とか逃げる口実を探し続けた。

そうするうちに前日の妻の言葉が思い出されてきた。「Bさんがそこまでして自分のことを語っていったのに、あなたは向き合うどころかBさんを捨てて、そのまま逃げて帰ってきたとね？ 良か教員になっていきよるね。」この言葉が重く自分にのしかかってきた。Bさんに返していかなければならないのは、この私自身ではないのか。

私は、恐る恐る自分のことを話し始めた。

高校生の時、同級生らと水俣病問題を話すことでチッソの一株株主運動などに少しかわるようになったこと。そして大学受験が近づくに従い運動に背を向けていったこと。大学に入った後も、気になりつつもチッソの株主総会の通知や、水俣病事件から逃げ続けたこと。教員になってから免罪符を買うかの如く水俣病事件に取り組み始めたものの、自分事として取り組めないまま、結局は、逃げ続ける自分だったということなど。

すると、Cさんが恥ずかしそうに立ち上がり、事故を起こして人を死なせた兄と、そのことで気まづくなった家庭の事を話し始めた。

それに続くように、少し前に兄を事故で亡くしたDさんや、心臓病で何度も入院を繰り返しみんなの輸血でやっと生きてきたEさんが、それぞれの思いを話し始めた。

「母が認定されて私の家族は落ちていくばかりでした…」

そして、照れ笑いをしながらFさんが立ち上がった。それまで陽気でクラスの人気者だが、どこかその陽気さの中に不自然さを感じさせていたFさんが、話し始めた。

私の母は、今から2年前の1月末、水俣病に認定されました。そのこともあって私は、現代社会でやっている地域学習『水俣』の授業について、特に水俣病についてやるのがとても嫌でした。それは、私の母が水俣病なので、もし自分の母が水俣病だということがみんなに分かったらと思うと、いてもたってもおられない気持ちでいっぱいだったからです。水俣病の「み」というのを聞いただけで、胸がきゅんとしていました。

母は中学のPTAの役員も一生懸命やっていました。でも母が認定されて補償金をもらってからは、私の家庭は崩れていくばかりでした。近所の人たちからは、『あんたの所は水俣病に認定されてさぞよかる。補償金で家どん建ててさぞよかる。』『あんたの所の母ちゃんは最近、よか着物ば着てツンとしとらすが、男でも作らしたっじゃなかね。』などと冷たい目で言われました。近くの店に買い物に行くのも嫌でした。そのうち、父と母の間さえもうまくいかなくなって、父は農薬自殺までしようと思いました。それまではとても温かい家庭だったのに……。それに中学のときは補償金のこと『銀行ドロボー』と言われたりしたこともありました。だから修学旅行にもいきませんでした。私は家にいるのが嫌です。学校にいる時が一番いいです。

それまで外を向いて黙っていたG君が話し始めた。

僕のおじいさんは人間嫌いになってしまいました。おじいさんに水俣病の補償金が入って親戚の人が次々にお金を借りに来ました。おじいさんは、これは老後の大切なお金なので貸せないと断りました。それ以来とても親戚との関係が悪くなり、おじいさんは人間嫌いになってしまいました。

黙ってうつむいていたHさんがさらに続いた。

私のお姉ちゃんは、胎児性の水俣病患者です。お母さんはお客さんが来るたび、お姉ちゃんを隣の部屋に入れてしまいます。そんなお姉ちゃんがかわいそうです。

次々と子どもたちが口を開いていく時、出てくる言葉は思いがけないものばかりであった。普段何気なく明るく話しかけてくる生徒たちの心の中に、水俣病がいかに重い影を落としていつているのか、やっとその影の一部を垣間見たような気がして重い気持ちになっていった。

私は、ますますどうしてよいのかわからなくなっていった。

こんなに重い苦しい思いをしている生徒たちの存在に気づきもせず、それどころか無関心な生徒だと腹を立てていた自分。“地域学習「水俣」”と銘打ち、得意げに授業をやっていた自分がとても恥ずかしくなった。

私は、やっとその時、私の目を覆う厚いウロコが一枚剥がれ落ちたような気がした。「水



俣から日本を見せるんだ！」などと粋がりながら、その実、教員としての足場を水俣に持たないどころか、教員としての足場そのものすら持っていなかった自分を思い知らされた。一人一人の生徒の生活が見えていない自分を思い知らされるなかで、やっと私は本当の“地域学習「水俣」”とは何かを考えるようになったと思う。そして、「ニセ患者」「金の亡者」「過激派」という差別発言をひっくり返し、水俣病への正しい理解を深めていくにはどうしていけばよいのかを考え始めるようになった。

一人ひとりの生徒には、一つ一つの暮らしがあり、一つ一つの課題がある。その課題に向き合うことが、私のすべきことだと思えるようになった。授業で向き合うことが、担任として向き合うことが、地域民として向き合うことが、人間として向き合うことが、私のしていくべきことだと思った。

一人一人の生徒たちが見ている。私の授業を、いや私の生き方を。生徒の目が怖いとその時初めて思った。その生徒たちの目にどうこたえていくのか。まず人間として。そして教員として。それから、一人一人の生徒たちの思いにこたえていけるような地域学習「水俣 ～ その過去・現在・未来～」作りを目指していくことになった。

それはクラスの大きな動きになっていった

#### (1) 生徒会の動きへ

このLHRでの出来事は、その後、クラスに大きな動きを作り出していった。

それはまず、生徒会の立会演説会の場だった。クラスから選ばれた副会長候補の応援演説のなかで「…もっと水俣病についても真剣に考えていくべきだと思います。生徒会も今までのような動きだけでなく、水俣病に積極的に取り組んでいく必要があると思います。副会長候補のIさんはそのためにも生徒会でできっと頑張ってくれると思います」と応援した。

しかし、彼の声は、体育館のザワつきにかき消されていった。他の生徒たちの反応が冷たく無関心な、あるいは無関心を装うものであることを示していると思った。結果的に、Iさんは個人的な人気も手伝って副会長に当選した。しかし、彼の交通事故による長期入院のためもあって、生徒会としての水俣病についての具体的取り組みは、大津商業高校修学旅行団との公害学習交流会などにとどまった。

#### (2) 文化祭、そして、「今から一步の会」へ

その後クラスの中では、LHRからの一連の動きの中で、2学期に行われる文化祭に向けての取り組みが話し合われるようになった。そして、水俣病を少しでも正しく理解してもらおうと「水俣病」のテーマで文化祭に取り組んでいこうということになった。

その動きの中で、特にその取り組みを積極的に進めていこうという生徒たちがその実行委員となり、国立水俣病センターやヘドロ処理工事の作業所、そして百間港やチッソ水俣工場を見下ろす丘の上など、市内全域を自転車で回りながら資料を集めたり写真を撮ったりして、文化祭の準備を進めていった。

そして文化祭の当日を迎えた。生徒たちは期待と不安の入り混じった気持ちで、見に来てくれる人々を待った。結果的には多くの人たちが見に来てくれ、生徒たちもうれしかったようだ。

その中で、浜元二徳さん（小児性水俣病患者）や坂本しのぶさん（胎児性水俣病患者）など水俣病の患者さんたちが見に来られたということは、生徒たちの予期せぬ出来事であったと思う。生徒たちの多くは初めて会う胎児性の患者さんたちとの出会いに戸惑いながら、一生懸命車いすを押したりしてパネルや資料の説明などをしていた。そして、クラスの展示場から手を外せる生徒たちが空いている教室に集まってミニ交流会のようなものを持つことができた。

その時の生徒たちと胎児性の若い患者さんとの交流から「今から一歩の会」<sup>1</sup>に参加していく生徒も出てきた。

### (3) 生徒たちの声 「生の声を多くの人へ」「安心したような気がします」

3学期に入りクラスで、映画「水俣病 — その20年 —」（土本典昭監督）の映写会をした後、浜元二徳さんの講演会を行うことになった。それは、水俣高校公害教育の歴史の中で初めて、水俣病の患者さんが生徒たちに語りかけた時でもあった。水俣であるがゆえに、市民からの水俣病患者や家庭への差別（内なる差別）があったが故の、長すぎる空白をやっと埋めていく一歩であったように思う。

私は、生徒たちとのこれらの取り組みを通して、生の声に学ぶことの大切さを痛感させられた。次の生徒の感想文はそのことをよく示していると思う。

今まで、プリントや資料、そして先生の話などで水俣病のことは勉強してきました。しかし、水俣と言ってもどこか遠くで起こった過去の事を言うような感じがしていました。でも講演会で患者さんの生の声に接したとき、何かいつもと違って「ああ、本当にこんなことがあったんだなあ」と実感しました。これからは患者さんの生の声を多くの人に伝えていってほしいと思いました。

次のような生徒の感想もある。

水俣の事を、そして水俣病のことを勉強して、水俣というところが分かって安心したような気がします。また、これからは自信をもって「私の郷里は水俣です」といえるような気がします。

この感想文に出会ったとき、水俣病と向き合い、教室でとりあげていってよかったと心から思った。水俣を語ることが、水俣病を語ることがタブーであった水俣。しかも、生徒たちが足場としての水俣をしっかりと持てない、出身地を口ごもらなければならない状況があった

水俣。そんな状況下にあった時、教室で、街の中で「水俣」を、「水俣病」をともに語り考えることが、いかに生徒たちを力づけていくかを実感したのだった。

その時、教員にできることは闘ってきた人々と生徒たちをつなぐことだと思った。浜元二徳さんや坂本しのぶさんなどの多くの患者さん。患者さんを背負って株主総会へ参加した山下善寛さん（元新日本窒素労働組合執行委員長）のようなチッソの労働者。「水俣病の原因は差別だ。水俣で起こった食物連鎖の結果としての有機水銀中毒事件は、どうしても『水俣病』と呼ぶ以外にはない」といった原田正純先生などの良心的な医学者。そのような人々に話を聞く中でしか、生徒たちは力をもらってはいかない。見通しは暗くとも、一生懸命闘ってきた人々、現在も闘っている人々のなかに、生徒たちは「水俣の明るさ」を見ていく。力をもらっていく。

教員にできることは、事前学習の中できちんと事実を伝えることだと思う。そして子どもたちを、一生懸命闘っている人々につなげ、「自分事として考えることのできる人間」として育つ支援をしていくことだと思った。

#### (4) 自らの足場を持ち、自分事に引き寄せながら

水俣病をめぐるクラスの大きな動きを通して、もう一つ考えさせられたことがあった。それは、一人一人の生徒にはそれぞれの生活と課題があるということだ。それは当たり前のことかもしれない。そのことの意味が、クラスの動きの中で少しわかるようになった気がした。胎児性水俣病患者の姉を持つBさんの思いもわからずに、水俣病を語っていた私の失敗の意味を少しわかるような気がした。

一人一人の一つ一つの暮らしをどれだけ見ていこうとしているのか、見えているのか。それが最も、教員に問われていることのような気がする。教室の中で、子どもたちが心の垣根を取り外し、そこに交流が生まれていくとき、教室は、学校は、自然と動き始めるのではないかと思う。

学校は、知識だけを教えるところではないだろうし、ましてや知識を注入するように道徳を教え込むところでもないと思う。学校とは、人間同士の交流の中で未来に向かって動いていくエネルギーを作り出していく場であるべきだと思う。

学校で生徒たちは、私たち大人の、単なる知識としての言葉ではなく、生きていく姿勢のようなものを見ているのだと思う。問うているのだと言ってもよいだろう。生徒たちは何も言わないが、私たち大人の一つ一つの言葉に耳をそばだて、しぐさを見つめ、生き方を見届けようとしていると思う。そして、その人間を見抜く力には動物的な鋭さのようなものさを感じる。それらの視線にさらされるとき、単なる知識としての言葉や聞きかじりの理論は通じない。本物の何かを、自分事としての言葉や考えをぶっつけていくことでしか通じないのではないだろうか。

水俣高校に赴任するまでは、水俣病を自然環境の破壊や重金属中毒としてしか、とらえることができないでいた。そんな私は、高度経済成長のマイナスとして企業や行政の責任を問



うことで足踏みをしていた。社会環境の破壊、つまり家族や地域の崩壊という面や、自分自身の生き方を問うものとして、水俣病をとらえることができないでいた。しかし、患者さんたちの生の声を前にするとき、生徒たちのうめきを前にするとき、人と人とのきずなが断ち切られていく社会環境の破壊の問題だと思うようになっていった。

そして、チッソを支えてきた自分自身の生活が問われた。チッソの垂れ流しを見逃し行政のチェックを怠ってきた自分が問われた。差別を許していった自分が問われた。水俣病を学ぶということは、たんに水俣病の事柄を知ることではない。まさに自分の生き方を振り返ることだった。

子どもたちの声の中に、ニセ患者発言とか過激派発言を受けたとあった。「金もろて、さぞよかる」「あの人たちは過激派だ」とか。

どうして、なぜ、「人間の命を、健康を返せ!」「生活を返せ!」という当たり前の活動をやっていて、それが責められなければならないのだろう。

授業で私は、国民主権とか地方自治とか基本的人権の尊重とか、言葉ではああだこうだと、知識として教えていた。しかし、自分たちの暮らしを守り、家族を守っていくための行動が一番大切なことだと伝えきれていなかった。だから、水俣で水俣病の闘いをする人たちが金の亡者だ過激派だと言われてしまう。「あん人は水俣病の患者ばってん、パチンコや酒飲んで回りよらす。」という声もある。単にハンター・ラッセル症候群の劇症例をもって水俣病としてしまうような動きが、差別発言を引き起こす。

学校教育の中で水俣病を正しく伝えていかない限り、教室の中でじっと息をひそめていかなければならない子どもたちをつくりだしてしまう。

教室での出来事が起こるまで、私は何も怖くなかった。PTAの授業参観や研究授業は緊張したが怖くはなかった。生徒に見られているということを怖いと思ったことはなかった。しかし、教室の出来事以降は、子どもたちの目が怖くなった。「その目に、授業でどうこたえていくか?」そのことの大切さにやっと気がついたのだった。

原田正純先生は、「水俣に学ぶ」ということで5つの大切なことをしめされた。それは「現地に学ぶ」「当事者に学ぶ」「患者さんたちに寄り添う」「差別のある所に公害が起こった」「水俣から世界へ」の5つである。

## Ⅱ 水俣病差別 ～内なる差別・外なる差別～

水俣高校赴任当初はわからなかったが、水俣で暮らしていくうちに、患者さんや患者家庭への「過激派」「金の亡者」「ニセ患者」という差別発言（内なる差別）にたびたび出会った。そして「どこから来たの?」「あの水俣?」「水俣病がうつる」という周りの地域からの水俣市民への差別発言（外なる差別）を見聞きした。その経験の中で、水俣病はまさに差別の問題であると思うようになっていった。

「水俣病」の「み」の字を聞いただけで胸を強く締め付けられる生徒たちがいた。そして、その痛みには2種類あったと思う。つまり、患者家庭の子どもたちの「(内なる差別からくる)痛み」とそれを取り巻く水俣市民家庭の子どもたちの「(外なる差別からくる)痛み」との2種類が。

## 1. 「内なる差別」

### (1) 水俣の中での水俣病患者・家庭に対する差別

そうなのである。水俣では、チッソの、そして行政の起こした水俣病事件の被害者である患者さんたちに対して、支援どころか差別があったのだった。

水俣で、水俣病患者さんたちに対して絶えず「ニセ患者」「金の亡者」「過激派」という言葉がつきまとい続けた。チッソの、そして行政の起こした水俣病事件の“被害者”である患者さんたちが、水俣では「チッソをつぶすのか、この水俣を闇にするのか!」と、逆に“加害者”に仕立てあげられてしまっていた。

なぜ患者さんたちはそのように差別されたのか。その原因は大きく分けると二つあるように思う。

ひとつは、チッソや行政がつくりだしてきた差別意識である。

水俣市陣内という地域中心の城下町水俣に残存してきた歴史的差別意識。そして、それを利用しながらつくられた“チッソ城下町水俣”のなかで多くの人々は、チッソやお上に従順だった。日頃見下していた漁師村に水俣病の患者さんたちが出始めても、冷たかった。それどころか、初期においては「奇病だ」「伝染病だ」と差別し、腐った魚を食べたからだという風評すら流された。しかも、患者さんたちが闘いに立ち上がり始めると街の多くの人はチッソ防衛に動いた。

また、その頃行政は、解決に向けて努力するどころか長い間チッソ側にたち、この差別を黙認し、正しい水俣病理解のための情報を流すこともなく、差別を増大させていった。

差別のもう一つの原因は、人間の持つエゴイズムであろう。水俣病事件は、お金による補償という形をとってしか、その健康被害の問題を解決することができない。しかし、「解決」の根幹にある認定制度は、汚染者負担の原則のもとチッソの経営自体を直接左右するものであった。そのため認定制度が動き始めると、患者さんたちに向けて「チッソをつぶすとか! 水俣は闇ぞ。」という言葉が投げつけられていくことになった。しかも「政治的判断」のもとで大量に棄却者がでる頃になると、「ニセ患者」「金の亡者」という差別発言が追い打ちをかけるようになっていったのである。残念ながら、患者さんへの不十分な補償金ですら、その日その日を精一杯生きている街の人々に、ねたみ・そねみを引き起こしてしまった。また、企業城下町水俣は、チッソの盛衰が明暗を分ける街であった。そのために、患者さんたちの反公害・反差別の闘いは、街の人々の自己保存の本能を刺激し、「チッソをつぶすのか、水俣は闇だぞ」という論理のもとつぶされていこうとした。チッソや行政は当然このような動きを利用していくことになる。

現実には、以上のような二つの原因が複雑に絡み合いながら“内なる差別”を生み出していったといえるだろう。

## (2) 差別が水俣病をつくりだした

水俣市陣内を中心とする封建的身分制の名残り、チッソを城主として成立していく企業城下町との中でチッソの側に立っていく市民たち。そして戦後、海外より引き上げてきた人々が持ち込んだ植民地産業チッソ・軍需産業チッソとしての差別的企業体質。水俣病差別を生み出す前提がこうして作り出されていったといわれている。

まず、国家によって水俣病は切り捨てられ差別されていった。水俣病が公式に確認された1950年代というのは、どのような時代だったのか。それは戦後の復興が進み朝鮮戦争による特需ではずみをつけ、高度経済成長へ突入する時期であった。その時起こった水俣病は、高度成長の足を引っ張る厄介者であった。水俣病は、国家によって南九州の片田舎の漁師の事件として、三好復命書<sup>2</sup>などの警告や患者の叫びとともに切り捨てられていった。

そしてチッソも、明治の創業以来そうであったように、一部のしかも漁民の小さな被害補償の問題として、工場排水を垂れ流し企業利益を追求しながら、わずかなお金でこの水俣病事件を切り捨てていこうとした。

また、その頃、街の人々はチッソ城下町にあって、城主チッソの顔色を窺い、はたまた自分の食い扶持を確保するために「水俣病で騒ぐと、父ちゃんのボーナスの減る。」「俺の飯茶碗をたたき落とすとか。」といいながら長いものに巻かれ、水俣病患者の叫びに耳を貸すこともなかった。

この差別のもとに水俣病は発生し、被害は拡大し、救済は遅れに遅れていった。まさに国家の、企業の、そして我々のもつ差別性が、環境を破壊し多くの人々を殺し、水俣病事件を作りだしていったといえるだろう。

## (3) 教育と水俣病

教育の面でいち早く水俣病事件の正しい理解に向けた取り組みがなされていたならば、このような患者さんやその家族への差別の起こる余地は非常に少なかっただろう。少なくとも教室で苦しむBさんやFさんの姿を見ることはなかったはずだ。ところが、学校教育は水俣病公式確認以後、長い間水俣病事件をタブーにしてきた。もちろんチッソ城下町水俣にあって、水俣病を正面から取り上げ患者さんの思いを子ども達に伝えるべく努力してきた水俣芦北公害研究サークルの教員たちもいる。しかし、多くの教員はそうではなかった。長い間、「現在係争中だから」「チッソの子どももいるので」とかの理由で、管理職がまず尻込みをし、多くの教員もそれに‘右にならえ’をした。

そのツケが、つまり水俣病をタブーにしてきたツケが、結局、子ども達へと行ってしまった。街の大人たちの差別・偏見がそのまま子ども達へ刷り込まれていき、教育の場で是正されることなく、それは膨らんでいった。そして、患者さんやその家族は、その差別に晒され続けた。しかも、水俣における“内なる差別”の差別者たちは、“外なる差別”に出会うな

かでその被差別者となっていくことになった。

## 2. 「外なる差別」

### (1) 修学旅行先で

水俣高校勤務時代に次のような事件が起こった。修学旅行で薬師寺に行ったときのことである。東北地方の高校2年生の生徒200人くらいと一緒に、法話を聞くことになった。彼らのほとんどが男子で、しかもツッパッている生徒も少なくなかった。仮設テントの中では、盛んに「ガンを飛ばす」という状態があり、ぴりぴりとした雰囲気が漂っていた。

そんな雰囲気のなか、お坊さんが来られた。そして、「皆さん、どちらからですか？」と前列の生徒に尋ねられた。「山形です。」「あなた達は？」「…く…熊本からです…」「なるほど、北と南から来られたのですね。」「

それからお坊さんのユーモアたっぷりの話が始まり、テントには両校生の笑い声が響いた。しかし、その笑いとは裏腹に私の心は重くなっていった。それまで水俣病の学習をしてきていたのは、こんなときに「水俣から来ました!」とはっきり言える子ども達になって欲しいと思っただけのことだったのに。

ところが、事はそれだけではすまなかった。列の後方で男子が声をかけられていた。「どこ高校?」「…みな…水俣高校。」そのとたん、先ほどから本校生を牽制していた‘ツッパリ’グループの中から「うつろぞ!」「うつろぞ!」という声が出て列が乱れた。まわりの生徒も私も、ショックだった。その声で生徒はうつむき、固くなってしまった。すぐに相手校の先生方に話をして生徒達の前で、水俣病の患者さんや水俣の高校生の思いを伝えさせてもらった。

だがそのあと、一人の生徒がポツリといった。「これから先、外に出ていくときいろいろ苦労すつとだろな」と。心が痛んだ。

あれから多くの時間が過ぎた。しかし、似たような事件が時々報道される。状況は変わっていない。

### (2) 「外なる差別」 — 水俣の人々に対する、他地域の人々からの偏見や差別 —

「水俣の中での水俣病患者及び家族への様々な差別」を‘内なる差別’と呼ぶなら、修学旅行先での前述したような「水俣の人々に対する、他地域の人々からの偏見や差別」を‘外なる差別’と呼ぶことができるだろう。

修学旅行だけではない、部活の遠征、受験、就職、結婚といろんな場面で「水俣病じゃないだろうな」とか「あの水俣からきたのか」と言われ、イヤな思いをしたり実際に不利益を受けたりする。この被差別の痛みが‘内なる差別’に苦しむ患者さんや家族への共感へとつながっていけば、差別の解消への糸口になるのだが、現実はそうではないことが多かった。

当時、夏休みに卒業生を追って東京や関西そして中部地方に職場訪問によく行っていた。その時会いに行った卒業生たちは、挨拶もそこそこに「先生悔しかった!」といい始めた。どうしたのか訳を聞いてみると、「どこ出身か?」と聞かれ「水俣」と答えたら「なんやあ

の水俣病のや。お前は患者じゃなからうね。うつらんどね。あっちに行け。」と言われたというのである。

以前、「二小事件」というものもあった。新聞で大きく報道された。修学旅行先で「水俣病がうつる。」と言われ水俣の小学生が「原爆病」と言い返してしまった事件。似たような差別発言事件は最近も続いて起こっている。私のかつての教え子で「差別バス」という作文を小学校の時に書いた生徒もいた。それによると国道3号線を走る修学旅行のバスから「おーい、水俣病!!」という言葉の水俣の子どもたちに投げかけて走り去ったという。

水俣の人たちは、いろんなところで差別や偏見に出会ってきた。自分は被害者だという意識がとても強かったと思う。「水俣病があるから、自分たちは苦しむんだ。」「就職や結婚のときいやな思いをするんだ。」そのような大きな図式の中では、どうしても患者家庭の子どもたちは、息をひそめて生きていくしかない。

ところが、患者さんの思いとか患者家庭の子どもたちの思いが伝わっていくとき、内なる差別をしていた子どもたちの目のうろこが取れていく。「自分たちの苦しみというのは患者さんたちの苦しみに比べれば、そんなに大きなことではなかったのではないだろうか。もっと水俣病を正面に据えて、正しく理解し周りに伝えていく必要があるのだ。」と。

### (3) 他者への共感。そして「きずな」づくりへ

しかし、水俣病学習を通し、患者さんたちの生の声に触れ、公害のメカニズムや水俣病の病像を知り、企業や行政の責任を考え始めた子どもたちは、少しずつ変わっていった。自分の受けた痛みを、被差別の人々への共感へと育てていける子どもたちも育っていった。

子どもたちが、自分が受けた痛みを、他者の痛みへの共感の土台にしていくとき、被差別の状況におかれている様々な人々との「きずな」が生まれていく。

一人一人には、ひとつひとつの暮らしがあり、ひとつひとつの課題がある。その課題に向き合うなかで、事実を正しく伝えながら「きれたきずな」を「結ばれていなかったきずな」をつないでいくのが、これからの最も大切な営みなのだとおもう。

以前、日韓教育シンポジウムで「水俣病事件と差別そして、朝鮮」というテーマで話をしたとき、会場の男性が発言された。

「私は水俣出身です。学校の教員をしています。父はチッソの社員でした。母是水俣病関係の施設の看護師をしていました。私は、ずっと水俣病について語ることはありませんでした。今もしゃべりながら心臓がドキドキしています。やはり水俣病について、水俣病差別について子ども達にも正しく事実を伝えていかなくてはいけないと思いました。」

会場にいた高校生はこう発言した。「知らないことは罪だと思いました。水俣病と差別についてもっともっと勉強をしていきます。」

韓国の小学校の先生は「私は、中学2年のとき水俣病について授業で習いました。そして、韓国にも公害があります。しかしこのように差別の観点から、見たことはありませんでした。勉強になりました。」と発言された。



水俣病は産業「公害」である。単に個人のモラルの問題ではなく、資本主義という仕組みのなかで、「金儲けをするには多少のリスクはやむを得ない。」「この国の経済成長のためには企業優先で行かなければならない。多少漁民や環境に被害が起きても…」という“公害のメカニズム”からおこってきた。つまり、組織的な差別の中から公害は起こされてきた。その点を見失うと水俣病事件は、単なる有機水銀による環境汚染の問題として片づけられてしまうと思う。

しかし、他人を、他国を、“沈め石”にして、その上に、自分の、自国の、“富”を築く。まさに“資本の論理”“公害のメカニズム”はいまだに健在なのだとおもう。植民地産業・軍需産業としてのチッソの歴史が、公害企業としてのチッソの歴史が、そして、日本資本主義の負の歴史がまたくり返されてはならない。

しかし、同じような歴史が福島でも繰り返されている。そして水俣病事件はいまだに終わることが出来ないでいる。水俣病公式確認から65年が過ぎたというのに。

注)

1. 「Ⅰ 教室での出来事、そしてその後」については、水俣高校勤務当時、日教組全国教研や教員組合の各種研究会等に報告したレポート（参考文献4、5）等をもとに作成した。
2. 「Ⅱ 水俣病差別 ～内なる差別・外なる差別～」については、1986年発行の『思想の科学』 No78 (pp.49-56) 石井雅臣「教育と水俣病」等をもとに作成した。

#### 参考文献

- 1) 色川大吉（述）・反公害水俣共闘会議編『水俣 — その差別の風土と歴史：不知火海一調査団員団の証言』反公害水俣共闘会議、1980年。
- 2) 色川大吉編『水俣の啓示 — 不知火海総合調査報告』筑摩書房、1983。
- 3) 石井雅臣「教育と水俣病」『思想の科学』No78、1986年、pp.49-56。
- 4) 石井雅臣「社会科教育 地域学習『水俣』に取り組んで」日教組第33次・日高教第30次教育研究全国集会、東京、1985年。
- 5) 石井雅臣「公害教育LHRレポート『今水俣では……』」熊本県高等学校教職員組合 冬の集い、熊本県立水俣高校、1985年2月18日。
- 6) 松崎次男、岡本達明著『聞書水俣民衆史 第4巻 合成化学工場と職工』草風社、2004年。
- 7) 松崎次男著『聞書水俣民衆史 第5巻 植民地は天国だった』草風社、2000年。

- 1 「今から一步の会」は、市内の高校生や教員と胎児性の患者さん、そして町の人で作っていたサークルで、1985年に結成された。街歩きをして、車いすにとって不便な駅や市役所や商店街や店のつくりを調べ、福祉マップを自ら作った。また、船に乗って海から花見をしたり、「原爆の図展」を見に行く会を企画したり、海水浴に行くなどの活動をしていた。
- 2 橋本道夫編『水俣病の悲劇を繰り返さないために－水俣病の経験から学ぶもの』中央法規、2000年。「1952年8月、三好礼治県水産課係長が現地を調査し、漁業被害は水俣工場からの直接の排水と長い年月に堆積した残渣によって漁獲が減少してきたものと結論づけ、排水に対して必要によっては分析し成分を明確にしておくことが望ましいと報告」